

## 安息日問題

——マタイ伝第12章1～14節、他——

1993年11月7日

小池辰雄

ある働きから休む 聖書身読会 パリサイ根性 宮よりも大なる者 パウロの信交・神交の現実 無即無限無量 キリストを身に体して生きている者 キリストの靈生にあずかる日

## 【マタイ12】

1 その頃イエス安息日に麦峠をとおりに給いしに、弟子たち飢えて穂を摘み、食い始めたるを、<sup>2</sup>パリサイ人、見てイエスに言う『視よ、なんじの弟子は安息日に為まじき事をなす』<sup>3</sup>彼らに言い給う『ダビデがその伴える人々とともに飢えしとき、為しし事を讀まぬか。<sup>4</sup>即ち神の家に入りて、祭司のほかは、己もその伴える人々も食うまじき供のパンを食えり。<sup>5</sup>また安息日に祭司らは宮の内にて安息日を犯せども、罪なきことを律法にて讀まぬか。<sup>6</sup>われ汝らに告ぐ、宮よりも大なる者ここに在り。<sup>7</sup>「われ憐憫を好みて、犠牲を好まず」とは如何なる意かを、汝ら知りたらんには、罪なき者を罪せざりしならん。<sup>8</sup>それ人の子は安息日の主たるなり』

<sup>9</sup>イエス此処を去りて、彼らの会堂に入り給いしに、<sup>10</sup>視よ、片手なえたる人あり。人々イエスを訴えんと思ひ、問いていう『安息日に人を医すことは善きか』<sup>11</sup>彼らに言いたもう『汝等のうち一匹の羊をもてる者あらんに、もし安息日に穴に陥らば、之を取りあげぬか。<sup>12</sup>人は羊より優ること如何許ぞ。さらば安息日に善をなすは可し』<sup>13</sup>ここにかの人に言い給う『なんじの手を伸べよ』かれ伸べたれば、他の手のごとく癒ゆ。<sup>14</sup>パリサイ人いでて如何にしてかイエスを亡ぼさんと議る。

## 【マルコ1】

<sup>21</sup>斯て彼らカペナウムに到る、イエス直ちに安息日に会堂にいらりて教え給う。<sup>22</sup>人々その教に驚きあえり。それは学者の如くならず、権威ある者のごとく教え給うゆえなり。

## 【マルコ2】

<sup>27</sup>また言いたもう『安息日は人のために設けられて、人は安息日のために設けられず。<sup>28</sup>然れば人の子は安息日にも主たるなり』

## 【ヨハネ5】



5ここに三十八年、病いになやむ人ありしが、6イエスその臥し居るを見、かつその病いの久しきを知り、之に『なんじ癒えんことを願うか』と言ひ給えば、7病める者こたう『主よ、水の動くとき、我を池に入る者なし、我が行くほどに他の人、さきだちて下るなり』8イエス言ひ給う『起きよ、床を取りあげて歩め』9この人ただちに癒え、床を取りあげて歩めり。

その日は安息日に当りたれば、10ユダヤ人、医されたる人にいう『安息日なり、床を取りあぐるは宜しからず』11答う『われを医ししその人「床を取りあげて歩め」と云えり』12かれら問う『取りあげて歩め』と言ひし人は誰なるか』13されど医されし者は、その誰なるかを知らざりき、そこに群衆いたればイエス退き給ひしに因る。

#### 【ガラテヤ2】

20われキリストと共に十字架されたり。もはや我生くるにあらず。キリスト、わがうちに在りて生きてきたもうなり。

#### 【民数紀略28】

9また安息日には当歳の羔羊の全き者二匹と麦粉十分の二に油をまじえたるその素祭とその漚祭を献ぐべし。10是すなわち安息日ごとの燔祭にして常燔祭とその漚祭の外なる者なり。

#### 【サムエル前書21】

1ダビデ、ノブにゆきて祭司アヒメレクにいたる。アヒメレク懼れてダビデを迎えこれにいいけるは、汝なんぞ独にして誰も汝ともならざるや。2ダビデ祭司アヒメレクにいう、王我に一つの事を命じて我にいう我が汝を遣わすところの事およびわが汝に命じたる所については何をも人にしらするなかれと。我其の処に我少者を出しおけり。3いま何か汝の手にあるや、我手に五つのパンか或はなににてもある所を与えよ。4祭司ダビデに對ていいけるは、常のパンはわが手になし。されど若し少者婦女をだに慎みてありしならば聖きパンあるなりと。5ダビデ祭司に對ていいけるは、実にわがいでしより此三日は婦女われらにちかずかず且少者者等の器は潔し、又パンは常の物のごとし。今日器に潔きパンあれば殊に然と。6祭司かれに聖きパンを与えたり、其はかしこに供前のパンの外はパンなかりければなり。即ち其パンは下る日に熱きパンをささげんとて之をエホバのまえより取りされるなり。

#### 【ホセア6】

6われは愛情をよろこびて犠牲をよろこばず 神をしるを悦ぶこと燔祭にまされり。



## ●ある働きから休む

今日の主題は「安息日問題」としました。

「その頃イエス安息日あんそくにちに麦畑をとおりに給いしに、弟子たち飢えて穂を摘み、食い始めたるを、<sup>2</sup>パリサイ人、見てイエスに言う『視よ、なんじの弟子は安息日にす為まじき事をなす』」

私は無教会にいた頃、藤井先生や塚本先生の集会に通っていたが、実によく安息日を守った。まずほとんど安息日に集会を休んだことはなかったでしょうね。

「安息」という言葉は、ヘブライ語で「シャバット」といって、

「ある働きから休むこと、手を引くこと」

をいう。だから、「何々から休む」という、ヘブライ語でいうと「ミン」、英語の「フロム」という字と一緒につかう。大体、畑仕事から手を引くことが元々の使い方だった。「から休む、から手を引く」という意味ですから、「安息」という訳し方が少し強すぎる。ユダヤ教でいうと、今の金曜日の夕方から土曜日の夕方になります。ユダヤ人というのは夕方から数えるんだ、

「夕あり、朝あり。これ始めの日なり」

とあって。それが安息日の言葉の本来の使い方だった。旧約の律法では、いろいろな細かい安息日の律法があるわけです。

そういう細かい事は、キリストは嫌いなんで、みなそれは否定して乗り越えてしまっている。

「些細ないろいろなゴタゴタした事柄は、キリストは断乎として斥けた」

と註が書いてありましたが、全くその通りです。

マルコ伝1章21節をみると、

「<sup>21</sup>斯て彼らカペナウムに到る、イエス直ちに安息日に会堂にいりて教え給う。

<sup>22</sup>人々その教に驚きあえり。それは学者の如くならず、権威ある者のごとく

教え給うゆえなり。」(マルコ1・21、22)

キリストはユダヤ人の安息日をただむげに否定したわけではなくて、一応それに従って礼拝する。「権威ある者のごとく」ではなく、

「権威ある者らしく」

です。

## ●聖書身読会

学者というのは、或るものを研究してものを言っている。これは二義的なんです。第一義的な人はみな創造的な人です。研究してものを言うのは第二義的なんです。

それでは、創造しなければ何がいかというと、そのものを、例えば聖書を——日本語



でもドイツ語でも何でもいい——それを本当に味わう。その中に自分を投げ入れて、祈り入って、味わって、作者と同じ心となるのが本当の読み方です。いわゆる研究ではダメです。学者の研究なんてものは二義的なことで、大したことではない。

第一義的なことは、普通の人々がそれを読んで味わって、その世界に自分を入れて、同じような存在、同じような行動になる。それが本当の読み方です。だから、「聖書研究会」なんかひとつもしなくていい。身読しんどくならいい。身体で読む。聖書身読会。そして、

「そのように生きましよう、そのように行動しましよう」

と。これが本当の読み方です。学者の研究を非常に重んじる人があるけれども、あんなものは第二義的なものだからダメです。ゲーテが『ファウスト』の始めの方でそのことを言っている。さすがはゲーテだ。

「いろいろ研究してやってみたけれども、結局、何も分からなかった」

と書いてある。ということは、

「研究という態度は本当はものを把むことではない」

ということ。聖書は身読しんどくするもので、研究するものではない。

要するに、研究者というものはみな第二義的なものです。第一義的なものは、その現実を自分が味わって、その現実を体現していくこと、体現する人。

「論語読みの論語知らず」

というのが本当に体現しない者のこと。キリストは聖書で

「私の言葉を研究しろ」

なんてどこにもおっしゃっていない。

「私の言を守れ、行え、従え」

とおっしゃっている。それが権威ある言葉なんです。そして、そういうようにすると、その人自身が今度は権威ある人になる。あなた方一人ひとりが本当の権威を持つことになる。それが人を動かす。そういうように本当に福音を实践した人は賀川豊彦です。

### ●パリサイ根性

「パリサイ人びと」というのは、

「安息日にはどういう事をしたから悪いの何のかんの」

と、そういうことを非常に問題にする連中です。律法に詳しくて、律法を實踐して善として自己義認者がこのパリサイ人です。人をすぐ審く、批判する。パリサイ根性というのはそういうものだ。だから、

「安息日に為すまじき事をなす」

なんて、すぐ訴える。そうしたら、イエスは、

3 彼らに言い給う『ダビデがその伴ともなえる人々とともに飢えしとき、為なしし事



を読まぬか。

これはサムエル前書21章の始めの方に書いてある。

「1ダビデ、ノブにゆきて祭司アヒメレクにいたる。アヒメレク懼れてダビデを迎えこれにいいけるは、汝なんぞ独ひとりにして誰も汝ともならざるや。2ダビデ祭司アヒメレクにいう、王我に一つの事を命じて我にいう我が汝を遣わすところの事およびわが汝に命じたる所については何をも人にしらするなかれと。我其の処に我少者わかきものを出しおけり。3いま何か汝の手にあるや、我手に五つのパンか或はなににてもある所を与えよ。4祭司ダビデに對ていいけるは、常のパンはわが手になし。されど若し少者わかきものおんなば聖きパンあるなりと。5ダビデ祭司に對ていいけるは、実にわがいでしより此三日は婦女われらにちかずかず且少者等の器は潔し、又パンは常の物のごとし。今日器に潔きパンあれば殊ことに然と。6祭司かれに聖きパンを与えたり、其はかしこに供前そなえのパンの外はパンなかりければなり。即ち其パンは下る日に熱きパンをささげんとて之をエホバのまえより取りされるなり。」(サムエル前書21・1～6)

ダビデが放浪の旅に出て、パンを食べるの食べないのという問題です。「遠慮するな」と。そこところが引用してあるわけだ。飢えた時に、ダビデはパリサイ的にしないで、彼は食べたい時には食べた。

4 即ち神の家に入りて、祭司のほかは、己もその伴える人々も食うまじき供のパンを食えり。

だから、ダビデはいわゆる律法を破っているのではないかと。ダビデという人はかなり福音的な面が強かった人です。預言者は本当にそうです。旧約でもダビデおよび預言者は非常に福音的で、いわゆる律法の世界を乗り越えています。坊さん、いわゆる祭司がいつまでもこだわっている。「神の家」とは幕屋のことです。

5 また安息日に祭司らは宮の内にて安息日を犯せども、罪なきことを律法にて読まぬか。

これは民数紀略28章9～10節のところに、

「9 また安息日には当歳の羔羊こひつじの全き者二匹と麦粉十分の二に油をまじえたるその素祭とその漚祭かんさいを献ぐべし。10 是すなわち安息日ごとの燔祭はんさいにして常燔

祭とその漚祭の外なる者なり。」(民数紀略28・9～10)

とあるのをキリストは心の中で引用して、

「祭司達すらもそうやったではないか」

と言っておられる。祭司もそういうように、いわゆる律法を乗り越えたのが本当の祭司だというわけです。「律法にて読まぬか」というのは、



「旧約の文献で読まないか」ということ。この「律法」という言い方はいわゆる律法のことを言っているわけではない。旧約聖書ということと同じです。

「律法と預言者」

と言うと旧約聖書のことを言う。律法の中には歴史のこともとたくさん入っている。それを「律法」と言っている。言葉の上から間違わないようにしてください。

●宮よりも大なる者

6 われ汝らに告ぐ、宮よりも大なる者ここに在り。

とは、キリストは自分のことを言われた。キリストは活ける宮ですから。動く宮です。即ち、いわゆる宗教は律法的なおきてでもって人を縛っている。旧約の世界ではそれが多。けれども、優れた祭司と預言者はそれを乗り越えている。そういった旧約的な宮、そんなものにはこだわっていない。キリスト自身は「宮よりも大なる者」です。だから、安息日もいわゆる安息日としては守らない。

7 「われ憐憫を好みて、犠牲を好まず」とは如何なる意かを、汝ら知りたらんには、罪なき者を罪せざりしならん。

これは預言者ホセアの有名な言葉を引用されたわけです。

6 われは愛情をよろこびて犠牲をよろこばず 神をしるを悦ぶこと燔祭にまされり。(ホセア6:6)

これは非常に大事な言葉です。

「本当の愛情が宗教だ。犠牲を捧げてやっているのは本当の宗教ではない、形式的

な宗教だ」

というわけです。

「神をしる」

とは、神さまとの交わりの中に入ることを「知る」という。頭で知るのではない。

「燔祭」という、こういうものを捧げて大いに宗教的だと思っているようなこととは違う。

「本当の宗教は、燔祭の犠牲なんていうことではないんだ、愛だ」

と。「愛憐」「憐憫」ということ。それが真の宗教だと。要するに、愛です。犠牲ではない。

犠牲は形式宗教。だから、犠牲の形式宗教が旧約では多かつたわけです。預言者は全然違う。

「人をあわれむ」ということ、「神を知る」ということは同じことなんです。

「神を愛することと隣人を愛することとは同じだ」

とキリストが言ったのは正にこれのことです。

「主、われを愛す」

という。主の愛を受けとって、そして主を愛する。主の愛がわれに流れてきて、その愛が



また主の方へ返っていく。これが、  
「主われを愛し、われ主を愛する」  
ということです。

「汝らが神を愛したのではない。神さまが汝らを愛した。それが先だ」と、ヨハネ書翰の中にも書いてあるとおりです。

7 「われ憐憫を好みて、犠牲を好まず」とは如何なる意かを、汝ら知りたらんには、罪なき者を罪せざりしならん。

麦の穂を摘んで食べた。それは何も罪ではない。それを罰するようなことをしたらとんでもない間違いだと。

8 それ人の子は安息日の主たるなり」

「人の子」とはキリストのこと。我々自身も「人の子」「神の子」です。キリストは「神の子」という言葉を「人の子」という言い方でおっしゃっていた、自分を表さなかったために。「安息日の主たるなり」とは、安息日にもとらわれない。その事を実際にキリストはなさったから。その後に書いてある。

9 イエス此処を去りて、彼らの会堂に入り給いしに、<sup>10</sup>視よ、片手なえたる

人あり。人々イエスを訴えんと思ひ、問いていう『安息日に人を医すことは

善きか』

これがパリサイ的な根性です、律法的なんです。休む日だから何もしないと、安息日にごだわっている。

「安息日に人をいやすのはいいのか」

と。もし、キリストが「よい」と言ったら、

「それは律法に反するではないか」

と言おうと思つたんだ。キリストはそれにいきなり答えない。

<sup>11</sup>彼らに言いたもう『汝等のうち一匹の羊をもてる者あらんに、もし安息日に穴に陥らば、之を取りあげぬか。<sup>12</sup>人は羊より優ること如何許ぞ。さらば

安息日に善をなすは可し』

人をいやして何が悪いか、と。

<sup>13</sup>ここにかの人に言い給う『なんじの手を伸べよ』かれ伸べたれば、他の手のごとく癒ゆ。

このキリストの権威というものは非常に愛をもった権威です。「手を伸べよ」というキリストは生命に満ちているから、

「我が言は靈なり生命なり」

だからキリストの靈・生命が、「手を伸べよ」と言うて伝わる。だから、治ってしまう。全く「わが言は靈なり生命なり」なんだ。キリストの言葉は、意味ではない。律法でもない。



教えでもない。生命づける。裁かない。救ってしまおう。

### ●パウロの信交・神交の現実

自分を本当に十字架で無にされていると、自我が無くなっていると、聖霊がはたらく。十字架・聖霊は決して分けてはいけない。十字架が土台になっている。そうすると、そこには聖霊が臨んでくる。「聖霊、聖霊」だけではダメなんだ、「十字架、十字架」だけでもダメだ。これは離してはダメです。これはパウロの言葉を見れば分かります。

「<sup>20</sup>われキリストと共に十字架されたり。もはや我生くるにあらず。

とある。その次に何とパウロは言ったか、

キリスト、わがうちに在りて生きたもうなり。」(ガラテヤ2・20)

と言った。

「われはキリストと共に十字架された」

十字架も、ただキリストの十字架だけではない。キリストの十字架をそのままいただいて、自分も十字架されてしまった。すると、

「もう私は生きていません」

と。ところが、

「み霊がわがうちに在りて生きたもう」

と言った。新しい生命が、聖霊の生命が私の中に充滿している。これがパウロの本当の信交、神交の現実です。

キリストと一つになっている。仰ぐのではない。それは自分でも分かる。そういう、自分がすつとんでいてキリストの力が来ていれば、病がとつかない。キリストの中に祈り入る、祈りしなければダメです。

朝、床の上で起き上がっている時に祈る。寝る前に祈る。「祈る」というのは、

「キリストの中に入る」

ことです。祈り入る。何かお願いすることではない。キリストの中に入ることで、後はキリストがいいようにしてください。何がどうなったっていいよ。しかし、このキリストの生命を奪うことはできない。

私は「死ぬ」という言葉は嫌いだ。私は死にませんから。「往生」という。往きて生きる。私はこの世を去った時には、「死んだ」とは言わせない。

「小池は往生しました、向こうへ往つて生きています」

と言ってもらおう。永遠の生命をいただいている者が死ぬか。もう死を乗り越えた世界だから、死を否定している世界だから。葬式なんて嫌やなものだな。私が向こう側に行ったら、皆さんは、

「万歳！」



と言ってもらいたい。泣かなくていい。

### ●無即無限無量

キリストと非常に一つとなつてゐる福音書はヨハネ伝です。ヨハネ伝は素晴らしい。福音書の中で一番大事なんです。ヨハネ伝は非常に靈的な福音書、最も靈的です。マタイは言葉の世界、マルコは行為の世界、ルカは心の世界、ヨハネは靈の世界です。福音書の特色は大体そうです。

マタイ伝の12章7節は非常に大事です。あわれみの世界が福音の世界。いけにえの世界はいわゆる律法的な旧約の世界です。だから、キリストはもう、安息日なんていうものを乗り越えてしまつてゐる。我々もそうなんです。

私は日曜日をとにかく一生懸命で守つて——悪かつたとは言わないけれども——藤井先生の集会、それから丸の内塚本先生の集会によく通つたものだ。おそらくほとんど休まなかつただろうね。そして、今日はつまらなかつたと思つたことはない。何かそこで得るものがあつた。けれども、あの時代は靈の感動のところには行つてない。聖霊を強調された話をほとんど聞いたことはなかつた。

私には敵がありません。みな兄弟姉妹だからね、敵がない。天下無敵というのは、強から無敵なのではない。こちらがどん底に立つてゐると、敵なんてものはありはしない。国際関係でも、政治家がそういった境地になつて本当の握手をすれば、何ということはないのだけれども。とにかく、政治の世界は本当の握手のできないところだ。

西郷南洲のような太い魂がいなくなつてしまつた。南洲は、

#### 「敬天愛人」

と言つた。本当に彼は天を敬し人を愛した。あれは自分の告白です。深い愛のひとつだ。南洲の伝記を読むと、やはり彼は本当の大人物だと思ふ。

あわれみが本当の福音の世界です。いけにえはダメ、そんなものは形式宗教です。

#### 8. 8. それ人の子は安息日の主たるなり

とは、安息日ばかりでない。あらゆる日に「主たるなり」です。日曜も平日も何もありません。安息日ばかりでない。あらゆる日に「主たるなり」です。日曜も平日も何もありません。

どの日もみな主体的に主であるためには、その日を本当に自分が主体的に歩くためには、キリストを先ず主体としなければダメです。キリストが主で、こちらは奴隷、僕しもべです。主体的に歩くためにはキリストを主体とする。そうすると本当に主体的に歩ける。何ものにも支配されない。安息日にもこだわらない。人をいやしたり、溺れそうな人があつたらそれを助けてやつたり。それが何がわるいかとキリストは言つておられるわけです。

そのことが9節からずっと書いてある。そうしたら、パリサイ人が何とかしてキリストをやつつけようと思つたと書いてある。



安息日だろうと、平日であろうと、何であろうと、そんなことにはこだわらない。いわゆる今の人達が言っている自由ではない。本当の自由は自分の自由を棄てている世界です。自分の自由を棄てていると、キリストの自由が入ってくる。そうすると本当に主体的になる。自由自在とはそういうことです。

自分の側はない。そこがやはり、

「無者」

なんです。自分の無い世界、無的実存。キリストが無者だったから、私はキリストのことを無者だと言った。キリストは神一切だから。神さまで動いていた。

「われ何ごをも為しあたわず。私は何も教えてない。言えということを行っているだけののはなしだ。為せということさせられているだけののはなしだ」

と。「無者」というのは逆に、「無限無量者」といってもいい。

「無即無限無量」

だから。神さまの、キリストの無限無量が入ってくるから、無限無量者にされているから、自由自在だというわけです。自我が十字架ですつとんでいるから、そうすると、聖霊の無限無量のはたらきがやってくる。だから、十字架と聖霊は絶対に離すことができない。この聖霊の世界が無限無量の世界です。

私はいつも同じことを言っているけれども、同じことをただオウム返しの様に繰り返しているのではない。いつも新しい気持ちで同じことを言っている。あなた方もいつも新しい気持ちで聞いていなければ。ご飯は同じご飯だけれども、ご飯を食べなければダメなんだ。霊の世界もそうなんです。いつも新しく食べる。ご飯の味はもう分かっているからと言って、食べないでいたら飢え死にしまう。また食べる。霊の世界も同じことです。

### ●キリストを身に体して生きている者

9 イエス此処を去りて、彼らの会堂に入り給いしに、<sup>10</sup> 視よ、片手なえたる人あり。人々イエスを訴えんと思ひ、問いていふ『安息日に人を医すことは善きか』<sup>11</sup> 彼らに言いたもう『汝等のうち一匹の羊をもてる者あらんに、もし安息日に穴に陥らば、之を取りあげぬか。<sup>12</sup> 人は羊より優ること如何許ぞ。さらば安息日に善をなすは可し』<sup>13</sup> ここにかの人に言ひ給う『なんじの手を伸べよ』かれ伸べたれば、他の手のごとく癒ゆ。<sup>14</sup> パリサイ人いでて如何にしてかイエスを亡ぼさんと議る。

このマタイ伝12章9～14節はマルコ伝3章1～6節、ルカ伝6章6～12節と相呼応しているところ。凄いな、キリストは。

ヨハネ伝5章にも出ています。病める者を癒してしまった。これも安息日の問題だ。

「5」ここに三十八年、病になやむ人ありしが、6 イエスその臥し居るを見、か



つその病の久しきを知り、之に『なんじ癒えんことを願うか』と言ひ給えば、<sup>7</sup>病める者こたう『主よ、水の動くとき、我を池に入る者なし、我が往くほどに他の人、さきだちて下るなり』<sup>8</sup>イエス言ひ給う『起きよ、床を取りあげて歩め』<sup>9</sup>この人ただちに癒え、床を取りあげて歩めり。

その日は安息日に当たりたれば、<sup>10</sup>ユダヤ人、医されたる人にいう『安息日なり、床を取りあぐるは宜しからず』<sup>11</sup>答う『われを医ししその人「床を取りあげて歩め」と云えり』<sup>12</sup>かれら問う『取りあげて歩め』と言ひし人は誰なるか』<sup>13</sup>されど医されし者は、その誰なるかを知らざりき、そこに群衆いたればイエス退き給ひしに因る。(ヨハネ5:5～13)

「誰だか知らないけれども、その人がそう言ったら、私は治ってしまったんだ」というわけです。

だから、我々は本当にキリストの十字架・聖霊を受けとつてその實力を持たなかったら、つまらんですよ。クリスチャンはキリストと同質のものを身に体している者が本当のクリスチャンで、そうでないものは名ばかりのクリスチャンということだ。「キリスト者」というのは大変なことなんだ。キルケゴールが、

「本当のクリスチャンというのは天才より少ない」

と言っている。キリストを本当に身に体して生きている者、それがキリスト者ということ。

「キリストは救主である」

とただ言っている者はひとつもクリスチャンではない。救いの實力をいただいている者が本当のクリスチャンです。

「<sup>27</sup>また言いたもう『安息日は人のために設けられて、人は安息日のために設

けられず。<sup>28</sup>然れば人の子は安息日にも主たるなり』(マルコ2・27～28)

これが「安息日にも主たるなり」ということ。安息日ばかりでなくて普段の日でもいつでも主である。

### ●キリストの靈生にあずかる日

我々はこうやって日曜日を、安息日を一緒にやるのは、キリストの生命にあずかるためです。安息日という言葉はあまりよくない。普通の働きをやめてキリストの生命にあずかる。即ち、日曜日はキリストの復活の日です。金曜日にキリストは十字架に架かって、三日目に甦った。キリストの復活日、靈生の日なんだ。我々にとつては安息日は靈生の日だ。安息日なんていう言葉はよくない。靈生日だ。我々が日曜日にこうやってお互いに一緒にやっているのは、

「キリストの靈生にあずかるため」

です。私は語りながら、あなた方は聞きながら、キリストの生命にあずからなかったらつ



まらない。聖書の解説でもお説教でも何でも無い。私はお説教なんか大嫌いだから。

「十字架で罪がゆるされ、聖霊でもつて生命をいただき、いろいろな働きができ、ありがたくてしょうがない」

と、こういうわけです。皆さんも、そういうわけで、

「毎日が楽しくてしょうがない、力が来てしょうがない」

というようになってきたら本ものだ。いかなる事にでつくわしても、ニコニコしているような魂。何が来ても、それはキリストの本当の隠されたる恵である。いよいよキリストと一つになる世界だ。キリストと一つになると、力が来るから、それに対処していくことができる。こういうわけです。

「ああ、今日はどうもスランプだ」

なんて、グチが要らなくなってしまう。愚痴がなくなる。それが本当に主体的な生き方です。尽くるところを知らず、「これで終わり」ということを知らない。限りなく。だから、「無限無量」という言葉が私は好きなんだ。限らない。

「これでよし」

と思つたら終わりです。『ファウスト』の中にも書いてある。

「或る瞬間に、ああお前はよろしいと言つたら自分は負けだ。これで満足したと言

つたらお終いだ」

と言つた。即ち、ファウストも追求してやまざる魂です。サタンに負けない。これが無限無量の終りを知らざるどころの在り方です。

「我は初めにして終りなり」

という言葉があるけれども、あれはあまり私は好きでない。終りは無い。無窮むぎゆうなんだ。完成したらおしまい。未成交響楽です。

皆さんも楽しくなりましたか。楽しくならなかったらダメだよ。

「はい、その通り」

と言わなくては。

私は時々、星を眺める。宇宙というものは不思議なものだな。限りなきごとくにして限りあるという。限りありとも、限りなしとも言えない。不思議なものです。全く不思議だね、無限無量は。

言葉で説明し尽くせるようなものは本当の世界ではない。本当の世界は言葉では説明し切れない。本当のものは、本ものはその人が体感するよりか、身体で感ずるよりか仕方がない。全存在的に感ずる世界です。説明でもなければ解釈でもない。研究でもない。

あなた方は本当に選ばれた人ですよ。福音の故に、福音のために選ばれた人。私は数を問題にしていない。質を問題にしている。あなた方の存在を私は本当に敬意をもって覚えます。

